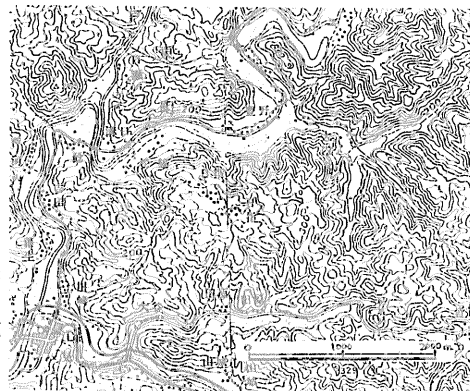


第14図
5万分の1地形図「津山東部」より 大篠の崩壊地点 曲りくねった実線は 北側の准片岩と南側の備北層群の境界をなす衝上断層を示す。



第15図
5万分の1地形図「津山東部」「佐用」より 海拔300m付近の平坦面の発達に注意 日指の集落はこの平坦面上にある。



写真⑯ 日指のがけくずれの一部 真下の家は倒壊した 手前は仮設住宅



写真⑰ 総社市秦地区 この崩壊は46年9月に発生したもので その両側に今回の豪雨による亀裂や流土が多数あるが 写真にはよくうつっていない。

九州 班

天草以外の観察記録

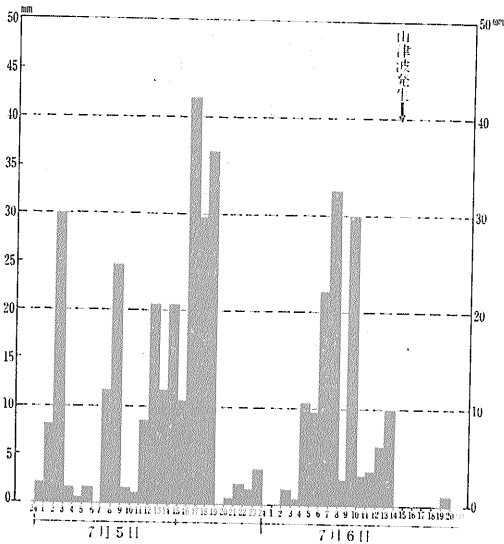
木野 義人

宮崎県えびの市真幸地区

この地域は かつての「えびの・吉松地震」で有名な加久藤カルデラの北西隅に位置している。7月6日14時10分ごろに それまで とくに7月4日～6日の累計426mm という豪雨によって 真幸駅北方の山の中腹で地すべり性崩壊が発生し 土石流によって住家28棟・非住家29棟が押し流され 25世帯68名が被災し うち死者



第1図 1:25,000地形図「吉松」より 土石流の分布 太い実線はシラスの分布上限である海拔300mを示す。

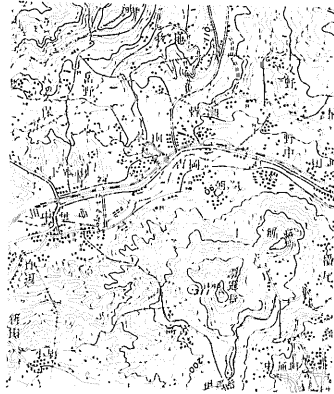


第2図 真幸地区京町における時間雨量分布

・行方不明合わせて4名を出した。さらに 国鉄線路や付近の田畑が埋没した。

この付近は 新第三紀の安山岩類を主とする地盤が温泉変質を受けて粘土化するとともに その上に厚い崖錐堆積物が部分的に発達し しかも上が雨水を集積しやすいような地形になっていたところに 集中豪雨があつて一気に崩壊が発生し 土石が山津波となって押し寄せたものであろう。

えびの地区といえば ただちにシラスが連想され また一部には シラス地帯の崩壊であるような記事も見られたが シラスの分布範囲は海拔 300m 以下の場所であつて 今回の土石流の発生源は シラスの存在とは無関



第3図
1:50,000 地形図「佐世保」より
上本山 今回の地すべり地
第三紀層からなる山麓緩斜面状の台地末端の地すべりである。

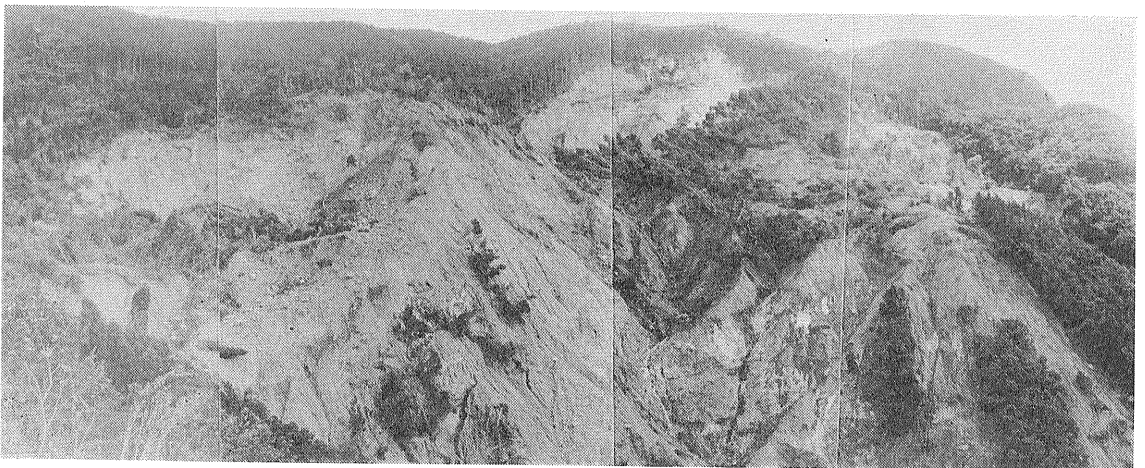
係である。真幸駅周辺には 小規模の山くずれが散在し堂山地区では 同じような亀裂も見られるので 今後とも警戒が必要であらう。

熊本県人吉市西大塚地区

胸川の上流左岸側にある地すべりで 県道が約 1.5m 陥没した。胸川上流一帯には このような浅い表層すべりのほか 山くずれが多数発生している。

長崎県深江町梶木地区

島原半島にある雲仙岳の1つである野岳(1,147m)および岩床山(697m)の東方急斜面の真下海拔280m付近のところに 梶木の集落がある。崩壊は 山体を構成している角閃安山岩とその碎屑物中に発生し 7月6日 14時40分ごろ標高 650m 付近のところから大陥落を起こし土石流となって 瞬時にして住家2棟が全壊し 2棟が半壊した。



写真①

真幸 大河平川上流

長崎県佐世保市上本山地区・柚木地区

長崎県北部の北松浦半島一带には 耕地関係だけでも 今回の豪雨によって12カ所の地すべりが発生した。

この地域一带は 北松型地すべり地帯として知られており 昭和28年の雨が多かった年には 地域全体に地すべりが発生し また上本山についてみても 昭和42年7月の豪雨の後に局部的に滑動した所がある。今回は上本山地区と柚木地区を観察したが いずれも第三系に属する砂岩・泥岩互層からなる地盤のうえに 背後の玄武岩類等に由来する厚い二次堆積物が 緩斜面をなしているのっており これが慢性的な地すべりを起こしているものが 今回の豪雨で再び滑動したものと思われる。

(筆者は 応用地質部)



第4図 1:50,000 地形図「伊万里」より 柚木地点 今回の被災地 海拔250m前後の山麓緩斜面上の台地には 厚い崖錐堆積物がのっており慢性的な地すべり活動をつづけている。

参加記録
あとがき

黒田 和 男

今回の技術調査団が現地視察を行なった範囲について地質的に 山くずれ・地すべりなどの地変と それによる災害をふりかえてみると まず 次のように大きく区分することができる。

(1) 長崎県佐世保北部および油谷湾沿岸の地すべり 第三紀層のうえにのっている崖錐堆積物が 豪雨によって一斉に動いたものとみられる。

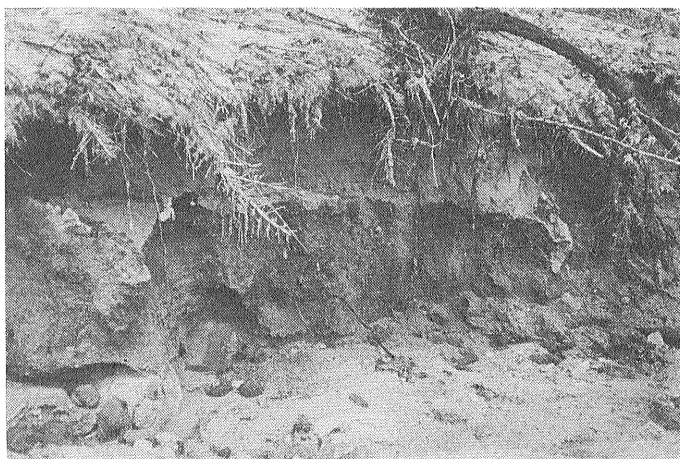
(2) いわゆる隆起準平原を深く下刻する谷の谷壁に沿う地すべり。 岡山県大平地区の例のように 准片岩～結晶片岩からなる地帯で 谷壁斜面上の表土(崖錐堆積物および現地成の風化生成物 いかえれば残積性表土)が豪雨によって移動したとみられる。

(3) その他の崖錐堆積物 島根県青原駅裏や山口県入屋地区のように 山麓

の崖錐堆積物が 豪雨によって移動したとみられる。この極端に大規模なものは えびの市真幸地区の例で 山頂付近でこれが発生したために大きな土石流に転化したものである。

(4) 溪間の堆積物が 豪雨によって再移動したもの 再移動のきっかけとして 谷頭部の小崩壊が存在する場合もあるし 小崩壊がまったく認められないものもある。天草や丹沢の場合は これが集積発生して大きな災害をもたらした。

(5) 花崗岩質岩石の山くずれ この共通点として山をきざむ谷の谷頭から崩壊が発生している。風化帯構造や山頂付近の崖錐堆積物(おそらく前輪廻の堆積物である)の存在は 側侵食 谷の下刻や



写真① 大谷でみられた扇状地堆積物の断面 露出したところで2つのサイクルがある。